
僕と先生

で買おう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と先生

【Nコード】

N5658F

【作者名】

で買おう

【あらすじ】

ちよつと冷たい小学五年生にその担任の変な先生が相談するとい
うどうでもいいお話。つまんね。

キンコーンカーンコーン。

下校の時間を知らせるチャイムがなりました。

今僕が居るのは自分のクラス、5年4組の教室です。

下校時刻なのになぜ帰らないのかというと、担任の先生に残っておくようにと言われたからです。早く帰りたいです。

あ、ちょうど先生が来ました。

「悪いな、残らせちゃって。」

「いえ、別にいいですけど。何か用ですか？」

「いやな、ちょっとお前相談に乗って貰おうかと思ってな。」

「そうですか、でも乗りたくないんで帰りますね、さようなら。」

「ちょ待てよ!」

「いや先生、全然似てません。ていうか、なんですか？」

「相談乗ってくれよ!」

「たくめんどくさいですね。」

「しょうがないですね、では話してみて下さい。」

「実は…」

「あ、先生、それ長くなりますか？」

「ああ、少しな。」

「じゃあ、無理です。見たいドラマの再放送があるんで。」「そんな冷たい事言わないでさ。」

「ちょっと、離して下さいよ。マヨネーズ大作戦始まっちゃうじゃないですか。」

「いいから。」

「いや、よかないですよ。離して下さい。」

「俺とお前の仲だろ？」

「いやそんなに仲良くないですよね僕達。ホント何なんですか？いかに離して下さい。」

「後でガリガリ君買ってやるから！」

「ブラックサンダーもいいですか？」

「わかった。」

「それならばマヨネーズ大作戦は我慢します。話して下さい。それと、離して下さい。」

「ああ、そうだな。すまんすまん。」

「で、相談とは？」

「実は先生な、3組の竹田先生が好きなんだ。これマジで。あつ、お前これ秘密だからな！？絶対言うなよ！」

「言いませんよ。そんなどうでも良いこと。」

「どうでもいいってなんだよー、先生真剣なんだよー。」

「真剣なら僕じゃなくて、もっと他に相談できる人いないんですか？」

「や、先生お前しか友達いなくて。」

「いやいつ友達になったんですか。先生と僕が友達だなんて初耳なんですけど。」

「いいじゃん。」

「いや、まあいいですけど。僕の他にも友達作りましょうよ。」

「えーいいよ友達なんて。」

「いや、よかないですよ。作れよ。」

「だって友達ならもうお前がいるしさ、な？鈴木。」「いや僕福田ですよ。誰だよ鈴木って。」

「惜しいっ!」

「いや全く惜しくくないですよ。福田と鈴木は全然違いますよ。」

「まあ、落ち着けよ。」

「落ち着いてるんでもう帰りますね。」

「待てよ福木。」

「誰だよ福木って。なんで混ざってんだよ。」

「冗談だつて、ごめんつて。」

「…はあ、それより相談が途中でしたよね。続きをどうぞ。」

「竹田先生と結婚したい。」

「すればいいじゃないですか。」

「どうしたら結婚できるかわからんだ。」

「そんな僕もわかりませんよ。だいたい小学生に相談でどうなんですか大人として。」

「すごく俺らしいと思うが?」

「わかりました。あんたがバカだつて事がわかりました。」

「おい福田、先生に向かってあんたはないだろ。」

「バカはいいのかよ……」

「そんな事より、竹田先生と仲良くなりたいたいんだよ！」

「……仲良くなればいいじゃないですか。」

「どうやったら仲良くなれるんだよー！！教えろよー！！！」

「泣かないで下さいようつとおしい。……はあ、食事に誘ってみるとかどうですか？」

「誘うってどうやって？」

「いや普通に。」

「バカお前恥ずかしいだろ！」

「じゃあ、メールとか電話で誘えばいいじゃないですかー。」

「それだっ！福田！アドレス聞いてこい！」

「…………自分で行けやあああ！！！」

「だって恥ずかしいじゃん？」「恥ずかしいじゃん？じゃあるかボケエエエ！ええ加減にせえよお前え！！人任せにせんと自分で行けえ！！！！！」

「わ、わかったよう。怒んなよう。」

「なら自分で行って下さい。」

「……い、いつてきます。」

これでやっとな帰れます。なんだか疲れました。

「待っていてくれよ？」

「ちっ」

「……福田君、今舌打ちした？」

「してませんよ。」

ニコツと笑って見せる。はよ行け、その間に帰るから。

「帰ったら成績オール1にするからな？」

わかったよ帰らないよこのやろおお。

「帰りませんから、早く行ってきて下さい。」

「よし、いつてくる」

く十分後く

「ただいま!」

「どうでした聞けました？アドレス。」

「おうよ！ただ無理に爽やかに笑おうとして、フヒヒってなったのはちょっと失敗だったかな。」

うわぁ…気持ち悪い

「でも、良かったですね。ちゃんと教えてもらえたんなら。」

「おう！悪かったな、付き合わせちまって。」

「いえ、じゃあ帰りますね。さようなら。」

「また明日な！」

先生は嬉しそうにしていました。疲れたけど、良かったかなって思います。

先生は授業中ずっと

「送信エラー！送信エラー！宛先カッコニーン！」

とか叫んでいたのとおりあえず爆笑しておきました。

（後書き）

まあ僕の文章力なんてこんなもんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5658f/>

僕と先生

2011年10月5日11時40分発行